

女子ラグビーの現状
— 普及、強化へ向けて —

愛知県立半田商業高等学校
北 林 靖

1 はじめに

私が高校女子ラグビーを担当し、これで5年目になる。もともと女子ラグビーは最近始まったのではなく、昔から競技として行われていたが、あまり知られていなかった。ラグビーをやっている人でも知っている人は多くはなかった。それは、競技人口も少なく、試合、大会などの機会も少なかったからである。さらに、ラグビーとは男のスポーツというイメージが強く定着していて、女性ではやりにくかったかもしれない。しかし、2016年リオデジャネイロオリンピックで7人制ラグビーが男女ともに正式種目になったことで普及、強化が加速し、女子ラグビーを取り巻く環境が大きく変わってきた。私が高校女子ラグビーの担当者として関わり、その中でいろいろなことが見えてきた。そしてこれから女子ラグビーの普及、強化に向けてどう取り組むべきなのか、課題は何か、どのように運営していったらいいのかを試行錯誤している。また、この発表により女子ラグビーを多くの人に知ってもらいたいという願いがある。

2 日本ラグビーフットボール協会の考え

【理念】

WE ARE RUGBY FAMILY

「ノーサイドの精神」を日本へ、世界へ。

「ラグビーファミリー」とは選手、ファンだけでなく、支える人々を含む、ラグビーに関わる全ての人を指す。

【ビジョン】

RUGBY : FOR ALL

「ノーサイドの精神」を日本へ、世界へ。

「ラグビーファミリー」を国内外に増大させ、日本ラグビーの国際力を高める。

【ミッション】

(1) 「ラグビーファミリー」を増大させる。

競技者、ファンはもとより、サポートをする人々も含めて、日本のラグビーファミリーを広げる。
特に競技人口を20万人規模に拡大する。

(2) 日本ラグビーの国際力を高める。

- ① 2019年日本開催のラグビーワールドカップを成功させる。日本代表はベスト8入りを果たす。
- ② 2016年リオデジャネイロオリンピックにおいて、7人制日本代表のメダル獲得を目指す。
- ③ アジアにおけるラグビーの普及、強化に貢献する。

3 歴史

女子ラグビーの起源は1891年のニュージーランドと言われているが、記録が残っていないこともありはっきりとしない。1903年のフランスや1913年のイングランドという説もある。記録に残っているものでは、1917年にカーディフ（イギリスのウェールズ）で行われたチャリティマッチでカーディフレディースが6-0でニューポートレディースを下したのが最古である。その後、1960年代に西ヨーロッパに広がり、1970年代以降カナダやアメリカなど世界各地に広まった。

日本では1983年の世田谷レディース誕生が女子ラグビーの発祥とされている。そして、1988年に日本女子ラグビーフットボール連盟が設立された。当時の加盟チームは15チームでその年には、東京・駒沢陸上競技場補助グラウンドで第1回女子ラグビー交流大会が開催された。日本女子ラグビーフットボール連盟は（財）日本ラグビーフットボール協会の関連団体として活動を続けていたが、2010年には2016年夏季五輪での7人制ラグビー正式採用を受け、女子ラグビーの競技力向上と更なる普及拡大を目的として女子連盟を発展解消する形で協会内の一委員会として女子委員会が発足した。現在は、女子委員会を中心となり日本国内の女子ラグビーの強化・普及を担う活動を行っている。

4 競技人口

世界の強豪国であるニュージーランド、イングランド、オーストラリアでは女子の競技人口は1万人近くいるが、日本は約3,000人程度である。その中でも高校生女子の競技人口を地域ごとに挙げてみた。

高校女子競技人口（初心者、経験者含む）

北海道	人数	東北	人数	関東	人数	北信越	人数	東海	人数
北海道	18	青森	14	茨城	13	新潟	19	岐阜	0
		岩手	6	栃木	9	富山	0	静岡	12
		宮城	1	群馬	23	石川	0	愛知	4
		秋田	8	埼玉	6	福井	0	三重	10
		山形	0	千葉	17	長野	3		
		福島	1	東京	23				
				神奈川	18				
				山梨	4				
計	18	計	30	計	113	計	22	計	26

近畿	人数	中国	人数	四国	人数	九州	人数		
滋賀	0	鳥取	0	徳島	14	福岡	28		
京都	12	島根	34	香川	1	佐賀	2		
大阪	33	岡山	2	愛媛	18	長崎	5		
兵庫	30	広島	0	高知	2	熊本	6		
奈良	0	山口	2			大分	7		
和歌山	1					宮崎	5		
						鹿児島	14		
						沖縄	12		
計	76	計	38	計	35	計	79	全国合計	437

4年前は約130人だった競技人口が437人にもなっている。それは2011年から高校生の女子を対象とした全国大会が始まったことが大きいと言える。もともとラグビーは男子でも競技人口が少なく、地域格差があるわけだが、女子にもその傾向はある。クラブチームが存在する都道府県（東京、群馬、福岡）、学校に女子ラグビー部がある都道府県（大阪、兵庫、島根）は特に競技人口が多くなっている。

5 男子・女子の違い

コート広さ、ルールは同じである。したがって体当たりをしたり、タックルをしたりなどの激しいコンタクトプレーもある。ヘッドキャップ、マウスピースの着用も国内の高校生以下は義務づけられているが、成人には義務づけられていない。結果、男子と女子でルール上の違いはない。しかし、スピード、パワー、パスの距離、キックの飛距離の違いは明らかである。

6 15人制と7人制の違い

	15人制	7人制
ポジション構成	フォワード 8人 バックス 7人 スクラムは8人で組む	フォワード 3人 バックス 4人 スクラムは3人で組む
試合時間	40分ハーフの80分 (高校生30分ハーフの60分)	7分ハーフの14分 (決勝10分ハーフの20分)
得点後の開始	得点された側のキックオフ	得点した側のキックオフ
共通点	コート広さ(70m×100m) 得点(トライ5点 トライ後のゴール2点 ペナルティゴール3点) オフサイドや密集での基本的なルール	

一般的に行われているラグビーが15人制で今回オリンピックに採用されたのが7人制ラグビーである。特徴としてはコート広さが同じで人数が少ないため、7人制の方が得点が入りやすい。コンタクトプレーが少ない。1人の運動量が多い。試合時間も短い。試合も15人制は1日1試合しかできず、連日は厳しいので試合と試合の間は数日間おく必要がある。それに対して7人制は1日に3～4試合行い、連日試合をすることも可能である。したがって20チーム程度が参加し、予選リーグから決勝トーナメントを行う国際大会の場合15人制は3～4週間掛かるのに対し、7人制は2～3日で日程が消化できる。そして7人制はラグビーの組織的な専門技術が少なく、少ない人数でできることから導入しやすいということで高校女子の試合では7人制を行ってきた。しかし、近年は15人制の大会も行われるようになってきている。

7 高校生の活動状況

女子選手の活動状況としては、学校に女子ラグビー部があればそこで活動している。ない場合は学校の男子ラグビー部に所属し、平日は男子部員と一緒に練習を行い、休日はクラブチームで練習・試合を行っている。学校にラグビー部そのものがなければ学校では他の部に所属し、週末だけクラブチームで活動している。

8 国内の主なチーム

(1) クラブ

八戸レディース 秋田ノーザンブレッツプレアデス 奥州アテルイ・ブロッサムス
横濱ラグビーアカデミー 名古屋レディース SCIX ラグビークラブ（神戸）
徳島セブンフェアリーズ 愛媛ラグール 福岡レディース 大分ウイメンズ
SWEETIE LADY BEARS（熊本） など

大人のチームがありジュニア部門を作ったチームと、ジュニア部門を対象に作られたチームがある。

(2) 学校

青森商業（青森） 大泉（群馬） 我孫子（千葉） 関東学院六浦（神奈川） 新発田農業（新潟）
東海大翔洋（静岡） 朝明（三重） 京都精華（京都） 関西大一（大阪） 追手門（大阪）
神戸甲北（島根） 石見智翠館（島根） 松山工（愛媛） 中部農林（沖縄） など

4年前は1校しかなかったのが、ここ数年で増加している。

(3) 社会人・大学生

北海道バーバリアンズティアナ 世田谷レディース 東京フェニックス ラグールセブン
日本体育大学 横浜TKM RKU ラグビー龍ヶ崎 GRACE アルカスクィーン熊谷
カラダファクトリー A.P.パイレーツ 名古屋レディース 追手門学院大学
九州産業大学 UNITED SEALS（自衛隊） など

昔から活動しているチームもあるが、ここ数年で設立されたチームが多い。クラブチームでもスポンサーがつき、いろいろな面でサポートがあり成り立っている。オリンピック出場を目指して7人制だけを練習しているチームもある。

9 主な大会

高校生の出場できる全国規模の大会は4つある。

(1) 全国高等学校女子7人制ラグビーフットボール大会（長野県上田市菅平高原・8月上旬）

全国を9ブロックに分けてブロック対抗で試合を行う。2015年からは15人制になった。

(2) U18花園女子セブンズ（大阪府東大阪市花園ラグビー場・12月27日）

男子の全国大会開会式後のオープニングで実施される。全国各地で選考会を行い選考された選手を東西に分けて試合をする。ハイパフォーマンス（高校入学以前からラグビーを経験している選手）と普及（高校入学からラグビーを始めた選手）のグレードがある。2015年からは15人制になった。

(3) 全国高等学校選抜女子セブンズラグビーフットボール大会（埼玉県熊谷市・4月上旬）

学校の部であろうがクラブチームであろうが人数が揃うチームを基本に大会を行う。しかし、人数が揃わない場合は合同・選抜チームの出場も認めている。

(4) 全国女子ラグビーフットボール選手権大会（東京江戸川競技場・11月23日）

関東・関西・九州の3地域の選抜選手による大会。2014年から開催され15人制で行われている。2016年には国民体育大会で7人制が実施されることになっている。

10 大会の過去の結果

(1) 全国高等学校女子ラグビーフットボール大会

第1回大会

優勝 EAST1（関東） 準優勝 WEST2（九州・中国）

第2回大会

優勝 関東 準優勝 九州 3位 中国 4位 東海

第3回大会

優勝 関東 準優勝 九州 3位 中国

第4回大会

優勝 九州 準優勝 関東 3位 中国

第5回大会（この大会から15人制）

優勝 九州 準優勝 関東 3位 中国 4位 近畿

(2) U18花園女子セブンズ

第1回大会

東軍 17 - 22 西軍

第2回大会

東軍 12 - 10 西軍

第3回大会

普及の部 ハイパフォーマンスの部
東軍 20 - 17 西軍 東軍 38 - 12 西軍

第4回大会

普及の部 ハイパフォーマンスの部
東軍 21 - 17 西軍 東軍 19 - 10 西軍

第5回大会

普及の部 ハイパフォーマンスの部
東軍 5 - 24 西軍 東軍 17 - 0 西軍

第6回大会

普及の部 ハイパフォーマンスの部
東軍 34 - 12 西軍 東軍 17 - 12 西軍

(3) 全国高等学校選抜女子セブンズラグビーフットボール大会

第1回大会

優勝 YRA・関東クラブ選抜 準優勝 市立船橋・関東選抜 3位 名古屋レディース

第2回大会

優勝 石見智翠館 準優勝 YRA・神奈川選抜 3位 福岡レディース

第3回大会

優勝 石見智翠館 準優勝 福岡レディース 3位 東京・埼玉・群馬・栃木選抜

第4回大会

優勝 石見智翠館 準優勝 福岡レディース 3位 神奈川県 4位 神戸甲北

関東、九州、中国の3地域のレベルが抜きん出ている。関東は競技人口が多く、ジュニアの世代からの育成システムがしっかりしている。九州はクラブチームを中心として普段からチームでまとまって

指導がされている。中国は石見智翠館高校中心で、多くの選手を県外から集めてチームを作り、毎日同じメンバーで活動している。近畿は学校で女子ラグビー部ができ、ジュニア世代の育成が整備されてきている。もともとラグビーが盛んで競技人口が多いこともあるので最近めきめき力を付けてきている。

11 国際大会

15人制の国際大会は4年に一度ワールドカップが行われている。強豪国はニュージーランド、オーストラリア、イングランド、フランス、カナダ、アイルランドである。このワールドカップに出場するためには日本はアジアでカザフスタン、香港、シンガポールといった国に勝たなければならない。

7人制の国際大会は4年に一度のワールドカップと1年間で世界各地を転戦して総合ポイントで順位を決定するワールドシリーズ、そしてオリンピックがある。強豪国はニュージーランド、オーストラリア、イングランド、カナダ、アメリカ、ロシアなど15人制の強豪国とほぼ同じではある。しかし、オリンピック種目になったことでラグビーがこれまで盛んでなかった国もこの7人制には力を入れてきている。中国やブラジルなどがそれに当たる。

12 まとめ

ここまで女子ラグビーの現状を挙げてみたが、普及・強化に向けて今後の課題、やらなければならないことをまとめてみた。

(1) 女子がラグビーをする場、機会を増やす。

ここ数年でだいぶ増えてきたが、他の競技と比べるとまだまだ少ない。もっともっと増やす必要がある。それにここ数年で大会・試合が増えた結果、レベルも数段上がってきているので、なおさら必要であると言える。

(2) 指導者を育成する。

きちんとした事を教えて、選手の能力を伸ばすためにはしっかりした指導者が必要である。自分の過去の経験を基に教えるだけでなく、指導者（コーチ）ももっと研修を積んで勉強しなければならない。

(3) 代表チームが強くなる。結果を出す。

今プレーをしているジュニア世代が夢を持てるように、そしてラグビーをやっていない一般の人にもラグビーを知ってもらうために代表チームの強化は必須である。

(4) 今、ラグビーをやっている選手に楽しんでもらう。

ラグビーに取り組む多くの女子高校生に出会ってきた。どんなきっかけでラグビーを始めたかは様々だが、せっかく始めたラグビーを続けていくためにはラグビーの競技活動に満足してもらわなければならない。そして更に仲間を増やしていくためにもラグビーを楽しめる環境作りは重要な要素である。